

## 学位論文審査報告

福田進治 『リカードの剰余理論の研究』

学位の種類 博士（博士（経済学））

授与年月日 2000年3月24日

### 〔論文内容の要旨〕

本論文は、英国古典学派経済学者 D. リカードについての、利潤、賃金などの理論体系における論理構成について数理的定式化を行いつつ動学分析としての視点から再検討を加え、その分配理論が資本蓄積論すなわち成長論への展開に至る理論形成史としての過程を追跡し、その鍵概念としての剰余の概念に関し、その体系における原理的位置づけを行った研究である。本論文の内容は、序章および終章に加え、4章から構成されており、リカードについての解釈と研究の方法論的基礎について、新旧を含めた理論的な諸吟味をリカードの文献的な事実にもとづいて裏づけ、それをリカードによる叙述の前提と結論の両立性からの検討という立場に一貫しておき、最近年におけるリカード解釈の趣旨を数理式を用いて検討し、学説史としてのあり方に一つの方向を与えた特徴を發揮している。

各章における趣旨を要約すれば、以下の通りである。

序章（リカード研究の現状と課題）においては、その整理を踏まえて自らの分析視点に関しての位置づけを行っている。つまり『リカード全集』刊行以降の、スラッファによる物量タームの投入産出体系としての「穀物比率モデル」に関しての適否、ホランダーの需給調整メカニズムを中心とした「一般均衡理論」的解釈の妥当性、さらには労働価値論にもとづいた「賃金との相反による利潤率の傾向的低下命題」の論証について検討を加え、ピーチの主張による趣旨、つまり、リカード体系における「剰余の理論」を「蓄積もしくは成長の原理」への展開における核心としての位置づけに立ち、その数理体系としての論理妥当性を吟味すること、それが本論文における爾後の立場と課題であることを明示している。

1章（初期リカードの利潤理論）においては、リカード初期書簡集で提示されている、「4つの比率」、つまり「物的比率」が「資本比率」および「需要比率」の制約を経て「生産比率」に導かれる論理展開を追いつつ、その前提となる生産条件（価格一定および労働生産性による価格規定）、および、結果となる利潤率の概念と適合するかどうか、その吟味を上記諸説の検討と照らしつつ進め、リカードによるそれら比率の提示を剰余理論の萌芽的形態またはそれへの発達過程にあると位置づけている。

2章（リカードの労働価値理論）では、労働価値論についての、リカードにみる3段階の発展経過を、成立期（初期より『原理』初版まで）、修正期（同初版頃から三版まで）、および完成期（三版頃から遺稿まで）に分け、「労働の標準」からしての「資本構成均等・不均等」、「貨幣価値の不変性」および「中間物の標準」などリカードがその都度挿入した諸条件についての検討を行い、それらを価格と分配の決定における、商品価格は商品—労働価値と貨幣価値の比率としての二重の体系とする、リカードの最終的な立場を踏まえ、利潤が「剰余」として決定される論理構

造を明らかにしている。

3章(リカードの賃金概念と動学分析)では、リカードの賃金概念を動学分析としての視点から再構成することに取り組み、同概念の解釈に関する諸通説の対立、つまり実質賃金が生存水準において一定(剰余原理の支持)、および成長率とともに変化(同原理の否定)の対立という、動学分析への導入に至る道筋を探り当て、「自然賃金」についてのリカード再定義、すなわち部門間均等な賃金は労働需給の一致を保証しない、資本蓄積率と人口増加率の均衡を保証する賃金は生存水準ではあり得ない、などの動学条件、つまり自然賃金、均等賃金、および均衡賃金の相当条件と、それらとは異なる生存水準賃金を指しつつ、『原理(5章)』賃金論は資本蓄積率の変化に関連する議論が主題であった、とする解釈を行い、以下のようなリカード動学分析の枠組みを展開する。

賃金財価格は、貨幣および(その)実質各賃金を決定し、実質賃金は人口増加率に影響を与える。一方貨幣賃金は利潤率に作用し、利潤率は資本蓄積率を決定する。自然賃金は通時的過程で資本蓄積率と人口増加率の一致を保証しつつ、両者は労働需給比率を決定し、同比率はまた貨幣賃金の決定にフィード・バックされる、という過程であり、そこで利潤は「剰余」として決定され、利潤からの投資として「蓄積」が決定されるという動学プロセスであり、論文著者は、これらを連立方程式体系に組み立て、その論理序列を追いつつ論証している。

4章(リカードの分配と成長の分析)では、リカード『原理』の議論を「価値論」と「分配論」に分類し、それらがそれぞれ実質賃金に与える影響(一定か変化か)の相違によってリカード体系を比較静学分析と動学分析に分けることが提案され、『原理』各章をそれぞれ両分析に位置づけ、比較静学と動学が、リカード全体系としてどう再構成され組み立てられるかを展開している。

比較静学分析では、労働価値理論を基本とし、実質賃金一定の仮定、労働投入を外生的に所与とし、均等利潤率成立の論証(『原理』4章価格論、部門間調整論として)、価格・貨幣賃金・利潤率の決定(同1章価値論、価値=分配論として)、価格・地代・貨幣賃金・利潤率の決定(同2章地代論)、「賃金+利潤額一定」の論証(同6章利潤論、1, 2, 6各章を合わせて地代を考慮した価値=分配論として)で、理論構造がひとまず完結する体系である。

動学分析は、資本蓄積率および人口増加率の決定に関連する問題を議論する体系とし、実質賃金変化の論理を導入し、労働投入(および貨幣賃金)が内生的に決定される体系でありそれらは労働者需給および賃金に関する動学的調整(同5章賃金論)、および一般商品の需給に関する動学的調整(21章蓄積論)のプロセスから成る体系である。

リカード体系はこれら比較静学分析と動学分析の二つの領域から構成されるとし、全体系は、これら各領域(同1, 2, 6, 5および21各章)から成る、蓄積と地代を考慮した〈価値=分配論〉の展開として整理されることが提唱されている。

終章(リカードの剰余理論)では、リカードの剰余理論は、生産条件は所与、均等利潤率が成立、生産過程は垂直型、資本構成は均等をそれぞれ前提とした上で、労働価値理論(および差額地代論)の論理を基本とし、「剰余の原理」と「蓄積の原理」であることが、本論文結論として集約的に説明され、リカード解釈の方法論的あり方として、「理論的貢献」と「文献的事実」の照合、および、「叙述の前提」と「叙述の結論」の両立性という、二つの観点から検討すべき

ことが強調され、結びとされている。

#### 〔論文審査の結果の要旨〕

本論文は、上記内容の要旨に述べたように、価値論から成長論にいたるリカードの体系を新古典学派の枠組みやスラッフリアンの枠組みにとらわれることなく、それらの解釈に再検討を加えながら、リカードの文献テキストを忠実に読み込み、しかも、それらをできる限り一貫性を持った体系によって再現することを試みている。すでに、T. ピーチが、剰余アプローチという立場から、新古典学派とスラッフリアンの解釈の双方を批判する書物を発表しており、本論文も、基本的にはピーチの解釈を踏まえている。しかしながら、ピーチは、新しく解釈されるリカードの経済学が、体系として論理的一貫性を持ったものであるか否かという検討を行っていない。

本論文の独創的な点は、剰余アプローチによって解釈されるリカード体系が全体としての論理整合性を持ったものであることを、数理的定式化によるモデル分析を用いながら示したところにある。議論は、利潤論、労働価値論、賃金論、分配と成長の理論と一貫性を保ちながら展開され全体系をその視野に収めている。そして、利潤論・価値論・分配論が比較静学の枠組みによって整理され、賃金論・成長論が動学の枠組みによって記述され、描写されている。このような整理の仕方は、最終章において、リカードの名著『経済学および課税の原理』に適用され、『原理』における諸章の位置づけ関係について、これまでとは異なったまったく新しい解釈が提出されている。このように本論文は、ピーチのリカード解釈のモデル化において、その論理面の追求と展開にその処理力を充分発揮している。また、それにとどまることなく、剰余アプローチによるリカード体系の整合的再構築を通じて、著者自身による新しい解釈を提示することをねらいとしており、この目的はほぼ成功裡に達成されているといえる。また、本論文の各章内容については、すでに、経済学史学会および立命館経済学会において、抜粋の上、適時報告されており、『立命館経済学』各号で掲載されている。

本論文にのみ限定した今後の課題として、以上に述べたように、本論文は、ピーチのリカード解釈を基礎としながらも、著者自身の独自の解釈も確認される。ピーチの解釈との相違点をより明確にし、それらをまとめることによって、本論文の独創性はさらに高まるものと思われる。また、リカードの成長論を比較静学の連続としてとらえる点、農業部門における収穫逓減をリカード経済全体の要と考える点において、本論文のモデルは、森嶋通夫教授のリカード・モデルに近いといえよう。本論文のモデルが、森嶋モデルとどのような点で異なっているかを、もっと明確にすることも、本論文の独創性を強調する上で必要であると思われる。また、各章で提示されている諸モデルの関係を一層明確にし、可能であるならば、本論文の全体像を表すよりコンパクトなモデルを示すことによって、読者は著者のリカード解釈を、より容易に理解できるであろう。これらの改善を加えるならば、本論文は、今後の研究者が無視できない有力なリカード解釈を与えることになるであろう。